

崎陽諏訪明神祭祀図（大阪中之島図書館蔵）

河野 謙

この『崎陽諏訪明神祭祀図』（以下『祭祀図』と略す）は、作者や絵師の名前などは不明ですが、いまから二百年前の文化年間（一八〇四〜一八一七）の、長崎くんちの後日の諏訪神社社頭から御旅所までの間に、十三カ町の奉納踊りと御神輿の行列を描いています。

この『祭祀図』の最大の特徴は、記録された情報量の多さです。奉納踊りと御神輿の行列をカラーで、人物約四千人、「町屋」約百軒、これだけ多くの人や家書き込んであります。二百年前の「長崎くんち」の姿が良く描かれています。

この『祭祀図』は現在、大阪府立中之島図書館の所蔵物なのですが、以前は住友家の所有で、明治三十九年（一九〇六）に同図書館に寄贈されたものです。長崎くんちに興味を持った住友家が、絵師を長崎に派遣したのか、それとも長崎の絵師に依頼して、数年がかりで完成させたものと思われ、巻物の全図は限定したある年のくんち風景ではなく、踊町が一巡する七年間を通して、目立って珍しかった奉納踊りが詳細に描かれ、二百年前の長崎くんちの総集編的絵巻です。



崎陽諏訪明神祭祀図（上巻）

『祭祀図』の序章に当たる上巻の冒頭には、神社全景が鳥瞰図として描かれ、次に傘鉾を中心に踊りを奉納する模様が生き生きと描かれています。注目すべきところは、後日の奉納踊の場所が、現在の長坂前の「踊り場」ではなく、その一段下の流鏝馬（やぶさめ）がおこなわれた馬場のすぐ上だったことです。踊場では社殿に向かって右側に棧敷を作り、この当時は新旧の両奉行ともに奉納踊りを見て、三体の御神輿（おみこし）を出迎え、御神輿の還御のあと神社に参拝し、再び棧敷にもどり流鏝馬を見たのです。そして見物人

は立派で、形は美しく、堂々としていました。

絵巻には御神輿に対して、深々と頭をさげて拝む人々、腰を折り、手を合わせ拝む人々が描かれ、二階の窓は御簾が降ろされ御神輿を見下すようなことは誰もしていません。当時の人々の諏訪神社への、心からの敬神の想いが描かれています。

御神輿の後には、輿（こし）に乗った大宮司が、その後には、老若男女が楽しそうに御神輿のお供をしています。

この神輿の行列に次いで先払いの御長柄二十本が登場してきます。これは長崎奉行の権威を示すシンボルで、これより行列は張詰めた気配に変わります。この長柄の後には、長崎奉行を代行した家老が御名代として馬に乗って登場。その後には年行司乙名、御前警護遠見番、御前警護船番、町年寄、御前警護町使、五箇所宿老、長崎会所目付吟味役、長崎会所請払役並格迄、阿蘭陀大小通詞、唐大小通事、と長崎地役人の整然とした長い行列が、お供をしています。またその後よりオランダ人と中国人も行列について歩いていることにも驚かされました。おそらく、オランダ人、唐人達は「長崎くんち」見物の帰りを描いているのでしょう。

住友本家が大阪に居ながらにして、長崎のくんち見物ができるような絵巻を創らせたおかげで、二百年後の私たちも二百年前の長崎のくんち見物が見えたのです。古文書に文字だけで書かれてはいたことが、画像でリアルに、あまるところなく、写真とかわらないような正確さで描かれています。美術的には単調で幼稚に思える部分も、情報伝達の観点から見ると非常に優れた絵といえます。冒頭に、町屋約百軒、人物約四千人と書きましたが、正確には四千七十三人。内訳は、出演者が二千七百八十一人、屋内の見物人が七百七十人、屋外の見物人が五百二十二人です。当時の長崎の人口は五万人を下回っていたので、長崎町民の約一割が描かれています。



崎陽諏訪明神祭祀図（下巻）

も丁寧に描かれています。行列の通りに面した家は、表の格子を開け放し緋毛氈を敷いて見物席とし、各家には家紋を染抜いた幔幕を張り、竹矢来が並べられています。

踊町の行列は、寄合町の本踊り。上筑後町の獅子踊り。本籠町の蛇踊り。勝山町の大薩摩。万屋町の鯨引き。不明の町・本踊り。伊勢町の竹ん芸。中巻の東浜町の唐子踊。八幡町の山伏行列。江戸町の阿蘭陀行列。銀屋町の鷹狩行列。袋町の本踊と続きます。昔のくんちは「通り物」が主でしたので其の意がよく描かれています。

この『祭祀図』に描かれている多くの町が行列仕立てですが、銀屋町は総勢二百人以上が帯刀した大名の鷹狩行列で最多数の「通り物」なのです。この『祭祀図』を描いた絵師の心に私は気がついたことがあります。それは長崎の人達の「くんち」にかける、純粹な神事に対する想いが伝わってくるのです。そこにはまったく長崎人の「くんちのこころ」を感じることが出来ました。

『祭祀図』下巻は、大波止の御旅所から諏訪神社への還御行列が描かれています。大鉾（おおぼこ）五本が先頭を進み、次に四種類十二本の鉾と御幣などが続きます。三体の御神輿の先払いとして数々の威儀物が進み、その後には「六角の御神輿」三体が登場します。この六角御神輿は宝永四年（一七〇七）に造られたものです。現在この古い御神輿は柳川の三島神社に払い下げられ、戦時下に其の二体は廃棄されましたが、三蓋松の紋がついた住吉神社の御神輿は現存しています。然し三百年前に造られた御神輿は、残念なことに飾り金具や部品の多くは欠落していますが、細工や塗り

風信

○本会の十月の行事は多忙でした。それは本会事務所のある桶屋町が七年ぶりに「長崎くんち奉納踊町」になったからです。本会にも町内より参加依頼があり、協会あげて男女総勢二日間で八十名は和服正装で参加されたと事務局より報告がありました。

○続いて十月二十四日より五泊六日の予定で、本会恒例の中国研修旅行に出発しています。参加人員は本保善一郎顧問を中心に原田正美会長他に十七名でした。研修先はサビエル聖人の遺跡上川島を中心に、近年発見された広州・漢時代の墳墓を中心にした博物館、世界遺産のマカオの聖堂街を研修の場として見学して歩きました。

○中国の空は毎日スモッグでどんよりとしており、一元は十六円でした。最近の中国は産業都市として年ごとに変わっていました。物価も年ごとにあがっていますと言われる。

○十一月七日夜は、県下唯一の式内社志々伎神社の夜神楽があり、千二百年むかしの神角力が拝見できるということで長崎日ボ協会と本会員の有志で出かけました。帰りに平戸に寄り松浦資料館、サビエル教会等も見学し帰りました。大変お世話になった。一同大きなウチワ海老の味噌汁は大変おいしかったと言われる。

○「第八回全国ぶらぶら節大会」が今年十一月二十六日午後二時より平野町の平和会館を会場に開催されるので、例年のように私に審査委員として出席して下さいと平川淨事務局長より依頼あり。当日は全国より出演者が集まってこられる由。「会費は無料ですから是非皆様もご自由に、おいで下さい」と本多由明代表幹事よりもお誘いの電話を戴いた。

○衆議院議員の富岡勉先生が突然事務所から「海シルクロード・ベトナムと長崎に架ける今昔の夢」を著述したのでと言われて、本を持参して下さった。巻末の参考書を見ていたら私が若い頃より御指導をうけている川島元次郎、岡田幸雄、岩生成一、永濱洋子の各先生方の御名前を拝見し、なつかしい思いで一気に読ませて戴いた。

○下関市の水産大学の中島邦雄助教授の御紹介状を持たれて「長崎べっこう」の研究に、成友ちえみ、田口愛のお二人がみえられた。私が先年「玳瑁考」という本を発刊していたので其れに対する質問であった。



同巻（鯨引き）

（長崎歴史文化協会協力委員）

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

